

「全鍍連」 2017年 6月号 巻頭言

全鍍連会長 森脇 隆 (森脇鍍金工業(株) 代表取締役)

「会長就任のご挨拶」



平成 29 年度通常総会で、会員組合の皆様のご信任を頂き、全鍍連会長に再任頂きました森脇でございます。現在、世界情勢は混迷の度合いを深め、それに伴って国際政治も大きく揺れ動いて予断を許さない状況にあります。

国際政治の動き、あるいは強まりつつある保護主義的な傾向で、先行きが極めて不透明にあります。このような状況下において、会長職という重責に身が引き締まる思いではございますが、歴代会長、そして栗原前会長が取り組んできた「日本の力 めっきの力」を継承してまいりたいと思います。

特にこのスローガンについては想いがあります。当業界において、組合活動の頂点は全鍍連であり、そして、めっき技術は国民の生活の豊かさに大きく寄与してきたと考えています。まさに「日本の力 めっきの力」を自負しています。

さて、様々な面でコンピューター化や IT をはじめとする技術革新が目を見張る勢いで進んでいます。また、消費者のニーズも日々変化しつつあり、その意味で我々の業界も絶え間ない変化を求められています。

一方、日本の中小企業の数が増減している中で、当業界も同様の状況にあります。工業統計上の出荷額は減少しておりません。

昭和 55 年では、事業所数 3,071 社で出荷額は約 3,900 億円に対し、平成 26 年は 1,493 社と事業所数は 5 割減となりましたが、出荷額は約 4,200 億円と増加しています。

しかし、先の見えない状況の中でいったいどこに向かえばいいのかというのは、現代に限らずいつの時代においても変わる事の無い不安、懸念の種になっています。

読者の方々にお伝えしたことは、「どこに向かえばいいのか」は、人脈と情報交換、技術力の強化で補完できるものと考えています。また、近年の全鍍連事業の趣は「交流と事業継続」と「情報の強化」にあり、今後もこれは変わらないと思います。

例えば、全鍍連経営委員会の事業は、経営情報のみならず、業界の「交流」を強化し、その対象は若手経営者の育成と女性経営者にあります。先輩経営者との意見交換会と女性部会は活況を呈しており、私感になりますが、通常、ある時期にさしかかると事業を見直すものですが、年々、こうした企画のリクエストが高まっています。

先輩経営者と若手経営者の意見交換会は、私の地元、当時の土井さんが経営委員長の時に立ち上げたもので、その先見の目に敬意を表しています。

一方、「事業継続」に関しては、技術力の強化につながっています。めっき技術コンクールの参加件数は 28 年度 350 件で、29 年度は 2 部門を追加し、5 部門にしました。コンクールによって、技術の研鑽、そして向上する意義を皆様全員が共有し、30 年、50 年たっても有意義な事業を考えていかなければならないと痛感しています。そして、「交流と事業継続」「情報強化」のミックスは、情報・国際委員会の海外視察研修だと思えます。参加者も若返ったことで、他の同業者を知るきっかけ、出会いの場にもなっています。

このように、人脈と情報交換は出会いが必要であり、そして各々が活きた情報を得るきっかけとなれば、これこそ、全鍍連のメリットだと思えます。

百年ほど前にフランスのある賢者が「我々は未来に向かって後ろむきに進んでいる」といっています。つまり、人は見ることの出来ない未来に背を向け、過去、つまり自分達が歩んできた道を見つめながら未来という闇に向かって後ろ向きに歩いている、と言っているのです。経済という人間の生活を支える基本となる活動は、何よりもまずものづくりにあります。

その上で、新しい技術開発や、先端的な知識、技術を海外から取り入れる為には、学会の先生方の協力支援が不可欠です。一方、それを実践の場で生かす技術力がなければ、何も生まれてこないでしょう。

知と技術、これこそがもの作りに携わる人間が激動の時代を生き抜く上で不可欠でありそれをもとにわれわれの業界も互いに協力し合いながら、今後過去を見つめ、そこから学びつつ、さらなる成長と発展を目指して歩んでいけるよう諸種事業を推進していきたいと思えます。そのためには、副会長、委員長各位と連携を強化して真正面から鋭意取り組み、会長としての責務を全うしていく覚悟でございます。末筆になりますが、先輩諸兄、執行部の方々、そして読者の皆様のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げ、私の就任のご挨拶とさせていただきます。